

“眼”、“眼睛”、“目”の基本義とその意味拡張<sup>1</sup>  
A Study of the Basic Meaning and Semantic Extension of  
Chinese “Yan”, “Yanjing” and “Mu”

日下部 直美

Naomi KUSAKABE

**Abstract**

This paper uses concepts such as “metaphor” and “metonymy” from the perspective of cognitive linguistics to discuss the semantic expansion of the noun “eye” in modern Chinese, and analyzes its cognitive mechanism. The paper discusses how “eye” has various meanings through “whole-part” metonymic extension based on the metonymy of vision based on the image schema of “container,” and metaphoric extension based on the shape of “eye”.

キーワード：身体部位名詞、メタファー、メトニミー、意味拡張

**I. はじめに**

様々な言語において、「頭」、「目」、「口」、「手」、「足」等の身体部位名詞は、身体部位を指す意味から異なる意味へと拡張している。身体部位名詞の中でも、各部位によって、拡張のパターン及び範囲が異なる場合があり、また、その様相は各言語において常に一つに定まっていない。これは、各言語話者がある対象を理解する際に、それぞれ異なる捉え方をしているため、それが言語表現に反映していると考えられる。

現代中国語においても、このことは当てはまり、身体部位名詞が様々な意味拡張をし、さらに、その身体部位のもつ意味的特徴を基盤とし、中国語特有の「類別詞」である「量詞」としても用いられている。

本研究では、言語話者である認知主体が、身体的な経験に基づき、外部世界の対象や事態を主観的に捉えることにより、その解釈が言語表現に反映しているという立場から、認知意味論の「メタファー」（隠喩）、「メトニミー」（換喩）の概念を用い、考察を行う。これらの概念を用いることで、現代中国語において、身体部位名詞が基本義から様々な意味へとどのように拡張しているかを分析することにより、中国語話者の捉え方、認識の仕方が言語表現にどのように反映されているのかを明らかにしていく。

日下部 2005 では身体部位名詞の「頭」を意味する“头”がメトニミー的拡張における「部分—全体」の関係、空間的位置と形状に基づいたメタファー的拡張、さらには“头”が量詞、接尾辞として用いられる場合においても基本義から拡張した意味に基づいていることを明らかにした。日下部 2020 では身体部位名詞の「手」を表す“手”がメトニミー

---

<sup>1</sup> 本稿は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した修士論文の一部を大幅に加筆・修正したものである。具体的には、例文を全て「北京語言大学中国語コーパス」：北京语言大学汉语语料库（BCC）（<http://bcc.blcu.edu.cn/>）で検索したものに変更し、それに伴い、分析においても修正を加え、新たに考察を行った。

的拡張における「部分—全体」の関係、参照点構造に基づく拡張、【接触】<sup>2</sup>のスキーマに基づいた拡張、「手」の「機能」に基づいたメタファー的拡張が行われており、さらには“手”が量詞として用いられる場合についても考察を行った。日下部 2021 では身体部位の「足」を表す“足”、“脚”、“腿”が参照点構造に基づいたメトニミー的拡張、【移動】のスキーマに基づいた拡張、「足」の「機能」や「空間的位置」に基づいたメタファー的拡張により様々な意味で用いられており、また、“脚”については量詞として用いられる場合についても言及した。

本稿では、身体部位である「目」を表す“眼”、“眼睛”、“目”について考察を行う。本稿で用いるメタファー、メトニミーの概念については、靱山 2002 : 65、76 の次の定義に従う<sup>3</sup>。

メタファー——二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。

メトニミー——二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。

“眼”、“眼睛”、“目”は全て「目」という<身体部位>を表す意味から異なる意味へと拡張している。本稿では基本義である「目」の意味から様々な意味へと拡張している認知メカニズムについて明らかにする。

## Ⅱ. “眼”、“眼睛”、“目”の基本義

身体部位の<目>を表す語として、“眼”、“眼睛”、“目”が挙げられる。この 3 つのなかで、“眼”と“眼睛”は、量詞を用いて“一只眼”や“一只眼睛”と表現することができるが、“目”は“\*一只目”<sup>4</sup>とはいえない。したがって、単独で用いられるのは、“眼”と“眼睛”<sup>5</sup>であり、“目”は単独では用いられず、“双目”、“刺目”、“怒目”というフレーズや“遮耳目”といった慣用句、または“目中无人”といった成語で用いられる<sup>6</sup>。

以下に、身体部位の<目>として用いられていると考えられる“眼”、“眼睛”、“目”の例を挙げる<sup>7</sup>。

---

<sup>2</sup> 【 】は概念を表し、< >は意味を表す。以下これに従う。

<sup>3</sup> この定義は、佐藤 1978 (=1992 『レトリック感覚』 講談社学術文庫) の考え方に基づき、まとめたものである。

<sup>4</sup> 表現の前に「\*」を加えたものは、このような言い方が不自然であることを表す。

<sup>5</sup> “眼睛”は“眼”と比べて、口語に用いられることが多い。

<sup>6</sup> “目”は、“眼”、“眼睛”とは、表す意味範疇が異なっていると考えられる。“眼”、“眼睛”は単独で具象物としての身体部位である<目>を指すことができるが、“目”の場合は単独で用いられることはなく、身体部位そのものを表すことはできない。

<sup>7</sup> 本稿で挙げた例文は全て「北京語言大学中国語コーパス」：北京语言大学汉语语料库 (BCC) (<http://bcc.blcu.edu.cn/>) で検索したものである。例文の日本語訳は筆者による。

- (1) 医生首先从捐献者眼部取下两小片角膜和一条结膜，然后移植到捐献者儿子的一只眼中。手术后父亲的视力没有产生明显变化。

[医者はまずドナーの眼部から角膜二片と結膜一筋を取り出し、その後ドナーの息子の片目に移植した。手術後の父親の視力には目立った変化は見られなかった]

- (2) 不过以后，面纱在埃及却被用作等级差别的标志，各阶层的妇女都得戴用。妇女因事出门，必须戴上面纱，只露出一双眼睛。人们只能从她手背的皮肤和说话的声音推断她的年龄。

[しかしその後、ベールはエジプトで階層差別の目印として用いられ、各階層の全ての女性は身に付けなければならなくなった。女性が用事で外出する際には必ずベールを身に付け、目だけを露出させる。人々は彼女の手の手甲の皮膚と話し声で年齢を判断するしかない]

- (3) 这种遮阳板我厂可以生产，并能生产司机夜间行车时为防止灯光刺目用的偏光安全镜。

[このようなサンバイザーは我が工場で生産でき、さらにドライバーが夜間の運転時にライトが目に入るのを防ぐために使われる偏光安全ミラーも生産することができる]

以下、この基本義から拡張したと考えられる意味について分析していく。

### Ⅲ. “眼”、“眼睛”、“目”の「全体一部分」の関係に基づいたメトニミー的拡張 身体部位の「目」を表す意味として、「目の一部」を表す場合がある。

- (4) “是您吗？在我身旁坐下吧。……”她闭着眼睛躺了五分钟，然后张开眼，对着您的脸看很久，用临死的人的口气问道：……

[「あなたなの？私のそばに座って……」彼女は目を閉じながら 5分ほど横になってから目を開け、あなたの顔を長い間見つめ、死に際の人々の口調で言った……]

- (5) 不同肤色、不同种族、不同民族的人共同生活在同一片蓝天下，同一个地球上。金发碧眼和黑发黑眼一起享受节日的快乐本身就是一个美好的画面。

[異なる皮膚、種族、民族の人間の共同生活が同じ空の下、同じ星に存在している。金髪碧眼、黒髪黒目の人がともに祝日の楽しみそのものを享受しているのは、まさに美しい情景である]

- (6) 二（1）班学生 MARIA 是一位引人瞩目的选手，她是西班牙人，黄头发、蓝眼睛、高鼻子，外表虽然与中国孩子不同，但她那标准的汉语读音，却令人感到惊讶。

[2-1 クラスの学生であるマリアは注目を集める選手である。彼女はスペイン人で、金髪、青い目、高い鼻であり、外見は中国の子どもと異なるが、その中国語の正確な発音には驚かされる]

上の例は身体部位である「目」全体を表しているのではなく、例文（4）では<まぶた>、例文（5）、（6）においては<瞳>を表している。これらは、「目」の一部であるため、「全体一部分」の関係に基づいたメトニミー的拡張であるということができる。

#### IV. 視覚のメトニミーに基づいた拡張 (1)

「目」は「見る」という機能、つまり「視覚」が関わっている。このことは、認知主体である人間が、「目」の機能という認知領域に〈視覚〉を含んでいると認識していることに基づいている。

本章では、山梨 1995 の「視覚のメトニミー」の概念を用いて、現代中国語における“眼”、“眼睛”、“目”の意味拡張について論じていく。

山梨 1995 では、「目」が〈生物の視覚をつかさどる感覚器官〉から、日本語の「目」の「視覚のメトニミー」の拡張として、(a) 視力、(b) 視線、(c) 視界、(d) 視野という意味を挙げている。この意味を参考にして、中国語における身体部位の「目」の意味拡張について考察していく。

「視覚のメトニミー」として、身体部位である「目」には必ず〈視力〉が必要であるといえる。〈視力〉を表していると考えられる例を見てみよう。

(7) 今年宋老已九十高龄，依然耳朵好，眼睛好，牙齿好，腰腿好，无大毛病。

[今年、宋さんは既に 90 歳の高齢であるが、耳も目も良く、歯も腰も丈夫で大きな病気も無い]

(8) 1995 年，天津市新河街小学 11 岁的学生张兴，父亲病故，母亲双目失明、下肢瘫痪，无人照顾，面临失学。

[1995 年に天津市新河街小学校の 11 歳の生徒である張興は父親を病気で亡くした。母親は両目を失明しており、下半身不随であったが、面倒を見る人がいなかったため、彼は中途退学に当面していた]

「見る」という「行為」を達成するには、必ず「視力」が必要である。そのため、両者には密接な関係があるといえる。そのため、身体部位である「目」を用いて、その「行為」を行うための〈視力〉を表していると考えられる。「視力」の有無が「目」の担う機能に深く関係していることから、「視力」なしでは「目」の意味拡張を論じることはできない。つまり、この〈視力〉が身体部位としての「目」の意味から拡張したその他の意味を支えていることができる。

この場合の認知プロセスとして、以下のように分析できる。まず、「目」の認知領域として〈視力〉が存在しており、この「目」が参照点となってそれが支配する認知ドメインの中にある〈視力〉という概念へアクセスしたと考えられる。このように考えると、「目」の認知領域と〈視力〉という意味は「全体一部分」のメトニミーの関係であるといえる。

また、単に〈視力〉だけを表すに止まらず、次のような意味でも用いられる。

(9) 检票除了要有速度还要有“好眼力”和“嘴上功夫”。杨东晨只要扫一眼车票，就能挑出时间、车次不符的旅客。

[検札は速さのほかに「観察力」と「口頭技術」も必要である。楊東晨は切符を一目見るだけで時間や列車番号が合わない旅行客を選り出すことができる]

(10) ……从研究文学史或某一个作家来说，“选本”当然是不够的，必要读全集。因为

“选本所显示的，往往并非作者的特色，倒是选者的眼光”。

[……文学史またはある作家の研究から言えば、「選書」では当然足りず、全集を読む必要がある。なぜなら選書が示しているのは往々にして作者の特徴ではなく、選者の見識だからである]

この場合、単に身体的な<視力>を表しているのではなく、さらにそれに伴う知識や経験が必要である<見極める能力>も表しているといえよう。

さらにこの<見極める能力>から、その能力を用いた行為を行う「人」という意味として用いられる場合もある。

(11) 有一个特点，他们做生意是看人行事的：对待外表堂皇、穿得阔气的人百般恭顺，服务周到；对待普通的劳动人民却十分冷淡。特别是那些“土里土气”的农民顾客，常常成为他们欺侮的对象。但是，就是在当时，人们也并不赞成这种行为，他们轻蔑地把这种生意人叫作“势利眼”。

[ある特徴として、彼らは商売をするのに、相手を見て手を打つ。外見が立派であり、贅沢な身なりの人に対しては全て大人しく従い、サービスも至れり尽くせりである。逆に普通の労働者に対しては非常に冷たい。特に田舎臭い農民の顧客は、常に彼らが見下す対象となっている。しかし、当時においても人々はこういった行為に対して賛同しておらず、このような商売人を軽蔑して「地位や財力に媚びる人」と呼んでいた]

呉 2014 は上のような“势利眼”について、<相手の地位や財力によって相手を差別する人>（現金な人）とし、視覚行為のフレームにおいて視覚行為の<行為者>として見なしている。すなわち、そのような<見極める能力>をもつ「人」そのものを表しているといえる。

## V. 視覚のメトニミーに基づいた拡張（2）

「目」を用いて<視線>といった意味を表す場合がある。これは、日本語にも存在する。例えば、「目を動かす」、「目を走らせる」、「目を転じる」等が挙げられる。これと同様に、中国語においても、「目」が移動動詞と共起する場合がある。

(12) 以后，任何一个矿工只要拿着自己的卡片，常怀吉过目一望，就能很快地在册子上找到他的名字，办好登记手续，发给劳保用品，前后仅花两三分钟的时间。

[これからはどの鉱夫も自分のカードを持っているので、常懷吉は目を通すとすぐにノートに彼の名前を見つけた。登録手続きを済ませ、労働保護用品を支給した。その間はわずか 2、3 分しかかからなかった]

(13) 下午开局，当马晓春 68 手并了，小林光一长考了许久，但他下出的第 69 手仍然受到观战室内的中日棋手的一致批判，小林光一走眼了，这对于他讲，是很少发生的大失误。

[午後の対局は、馬曉春が 68 手目を打ち、小林光一は長考したが、彼の打った第 69 手は観戦室の日中の棋士たちから一斉に批判を受けた。小林光一は見誤ってしまい、



これは彼にとって滅多にない大失策であった]

この場合も、山梨 1995 が述べているように、身体部位の「目」の意味ではなく、「視覚のメトニミー的拡張」による〈視線〉の意味を表していると考えられる。このことについて、山梨 1995 は次のように指摘している<sup>8</sup>。

外部世界を認知していく場合、単に問題の対象の刺激を受動的に受け入れるのではなく、外部世界の知覚対象にたいする主体の視線の能動的な投影が重要な役割をになっている。さらに言えば、外部世界の対象の視覚的な把握には、目のなぞり（より厳密には、視線のなぞり）がかかわっている。

つまり、この場合の〈視線〉という意味には、主体の意志が関わっているといえる。例文(12)、(13)のように、中国語にも日本語と同様に、“眼”、“目”を用いて、〈視線〉という意味を表す表現があることが分かる。

## VI. 視覚のメトニミーに基づいた拡張 (3)

〈身体部位〉の「目」は、「見る」という視覚行為を行う器官として、「視覚のメトニミー」のなかに含まれていると考えられる。つまり、〈見る行為〉は、「目」の〈機能〉の認知領域の中に存在しているため、身体部位の「目」で〈見る行為〉を表すことができる。

中国語において、身体部位の「目」が、〈見る行為〉を表していると考えられる場合がある。それは、“眼”が動量詞として用いられるときである。以下の例を見てみよう。

- (14) 当我铺开被子，准备睡觉的时候，我禁不住又趿着拖鞋，走到窗前，偷偷看一眼。他依然纹丝不动地站在那里，捧着一本书在看。

[布団を広げて寝る準備をしていた時、私は我慢できずにまたスリッパをつっかけて窓のところまで行き、こっそり覗いてみた。彼はまだ微動だにせずそこに立ち、本を手にして読んでいた]

- (15) 最后，一个女庄员说，她在一本书上看到中国有一种树能结棉花，她问科学工作队这是一种什么树。文化馆馆长向我们瞧了一眼，轻松地回答说：“这个问题请在坐的中国专家回答吧！”于是问题一下就转移到我们身上了。

[最後に、一人の女性農家が言うには、中国には綿花を実らせる木があると彼女はあ本で見たため、科学工作チームにこれが何の木か尋ねた。文化館館長は我々の方をちらっと見ると、「その質問は着席されている中国の専門家にお答えいただきましょう！」と軽快に答えた。そこで我々の方に質問が振られた]

- (16) 他笑起来，女孩子的小心眼儿太明显，“她还没有来，否则我要像昨天一样跟她去傅园散步。”她紧闭着嘴，狠狠盯了他一眼，匆匆向教室走去。

[彼が笑うと、女の子の気の弱さが際立った。「彼女はまだ来ていないよ。そうじゃなければ、僕は昨日と同じように彼女と傅園に散歩に行くつもりだったよ」彼女は

---

<sup>8</sup> 山梨 1995:223 参照。

ぎゅっと口を噤み、キッと彼を睨むと、さっさと教室に向かって歩いて行った]

この場合は、“眼”が動量詞として用いられることで、行われる行為の回数を表している。つまり、主体の行為に視点が置かれているといえる。これらの動詞は、「目」のもつ視覚機能を用いる行為であり、その行為に視点が置かれていることから、“眼”を用いて<見る行為>を表していると考えられる。従ってこれらは、上述した<視覚のメトニミー>に基づいた拡張として捉えることができる。

また、視覚動詞を表す動詞以外と共起する場合もある。

(17) 班长响亮地喊一声“起立”。同学们都迅即站了起来。老师扫了一眼全体同学，然后深深地鞠了一躬。

[クラス長は大きな声で「起立」と言った。クラスメイトはすぐに立ち上がった。先生はクラスメイト全体を見回すと、深々とお辞儀をした]

(18) 她倚着树干，仰头斜了一眼西天，太阳已经掉在两幢高楼的夹缝里，周围被染成一片桔红。

[彼女は木の幹にもたれ、頭を上に向け西の空を横目で見た。太陽はもう既に高い建物の間に沈んでおり、周りはタンジェリンレッドに染まっていた]

これらの動詞は、単独で現れた場合、視覚機能の意味はもたないが、動量詞“眼”と共起する場合に視覚機能の意味を表す。これは、“扫”は「水平」、「斜」は「斜め」といった方向性を含んでいることから、<視線>の意味と関連していると思われる。つまり、<視線>を対象に向ける際には対象が存在している位置が関係しており、その位置に主体が<視線>を向けることによって、方向が定まるためではないかと考えられる。この場合も同様に、<視覚のメトニミー>に基づいた拡張として捉えることができる。

## VII. 【容器】のイメージスキーマによる拡張

山梨 1995 は、<見る>という行為を、上に述べた主観的な行為として捉える他に、受動的行為として捉える解釈も指摘している。それは、「目」を「視覚的空間」として捉える解釈であり、この場合、「目」を「情報を受け入れる容器」としてみるため、【容器】のイメージスキーマの概念が関わってくるとしている。

(19) 可是，在游泳池里，她是那样“目中无人”，如海豚，似梭鱼。她，就是戴国红！戴国红的名字和身影，从西班牙的马利奥卡岛传向世界各地的报刊版面和电视屏幕。  
[しかし、プールの中では彼女は「眼中人無し」で、イルカやアカメのようでもあった。彼女が戴国紅だ！戴国紅の名前とその姿はスペインのマヨルカ島から世界各地の新聞の紙面とテレビのスクリーンに伝わった]

(20) 拉祜族的“拴福线”、哈尼族的“哭婚”、回族的“闹新房”……令观众大开眼界。一位外国游客感慨道：“在西方，结婚都去教堂，千篇一律，想不到中国老百姓的婚礼这么热闹，花样这么多，又这么美妙。

[ラフ族の「福を繋ぐ糸」、ハニ族の「泣き婚」、回族の「新居を賑やかす」……と

いったものに観衆は大いに見識を広げた。ある外国人旅行者は「西方では結婚は教会に行くのがステレオタイプです。中国の庶民の結婚がこんなに賑やかで、スタイルも多く、こんなに素晴らしいとは思わなかった」と感慨深く言った]

この場合、日本語の「目」についても同様の意味が存在しており、山梨 1995 は、情報が「目」の中に入ると考え、この場合、「目」は【容器】として捉えられていると述べている。上に挙げた例は、主体が意図的に行う、つまり能動的な意味を含んでいると考えられるが、主体の無意識な行為、つまり受動的な意味にも用いることができる。

(21) 孙子把老屋拆了，盖了四封三间大砖屋，购置了成套的家用电器。最碍眼的是那副楠木棺材，占了堂屋的三分之一，电视机只得搁在那棺材上。

[孫は古い家屋を取り壊し、四方を塞いだ三部屋のレンガ造りの大きな家而建て、家電製品一式を購入した。最も目障りなのはあの楠の棺桶で、中央の部屋の三分之一を占めていたので、テレビはその棺桶の上に置くしかなかった]

(22) 如今，霸县农民不仅买一般商品不用出县，就是许多城里人眼馋的名牌洗衣机、彩电、录相机，霸县农民也可买到。

[今、霸県の農民は普通の品物を買いに県から出る必要はなく、多くの都市の住民が欲しがっているブランドの洗濯機やカラーテレビ、ラジオでさえも、霸県の農民は購入することができる]

これらはすべて、非意図的に主体の〈視界〉のなかに、外部世界の情報が入ってくることを表しており、その対象を知覚して、主体が認識していると考えられる。つまり、これは、外部世界の情報が【容器】である「目」のなかに入ると考えると、【容器】のスキーマと捉えることができ、さらに、【容器】のスキーマと密接な関係があるといえる【到達点】のスキーマと捉えることも可能である。

また、「目」は〈情報を出す器官〉でもある。

(23) 从眼睛里流露出真心是理所当然的，“眼睛是心灵之窗”。深层心理中的欲望和感情，首先反映在视线上，视线的移动、方向、集中程度等都表达不同的心理状态，观察视线的变化，有助于人与人之间的交流。

[目からあふれ出た本心は当然のことながら、「目は心の窓」である。深層心理においての欲望と感情は、まず視線に反映される。線の移動、方向、注目の程度などは様々な心理状態を表しているので、視線の変化を観察すれば人と人とのコミュニケーションにおいて役立つ]

これは、「目」から自分の心理的情報を発信し、対象としての相手にその情報を伝達することを意味する。このことから、「目」を【容器】のスキーマと捉える解釈が可能なことを証明しており、この場合の【容器】のスキーマは、【起点】のスキーマと関連しているといえることができる。



## VIII. “眼”、“眼睛”、“目”のメタファー的拡張 (1)

「目」に形が似ているものを、身体部位の「目」を用いて表す場合がある。例えば以下のようなものが挙げられる。

(24) 很长一段时间里，人们误以为带虫眼的蔬菜就是无公害蔬菜。因此专家特别强调，带虫眼的蔬菜绝不等同于无公害蔬菜，有的农药残留量反而更高。

[長い間、人々は虫食いの穴のある野菜が有機栽培の野菜だと誤解していた。そのため専門家は、虫食いの穴のある野菜が必ずしも有機栽培の野菜ではなく、あるものは農薬の残留量が逆に高いと強く主張している]

(25) 不一会，他的衣服就被蒙上了一层黄色，耳朵眼里积了不少沙粒，嘴巴一动牙齿间就沙沙作响……，

[ほんの暫くの間に、彼の服は黄色に覆われ、耳の穴には沢山の砂粒が溜まり、口を動かすと歯の間でザクザクと音がした]

上の例文 (24)、(25) より、「目」の「形状」を、〈穴状のモノ〉として捉えており、また、これらの表現例から、比較的出入り口が小さいモノを指していることが分かる。したがって、これらの語句の特徴から、〈入口が比較的狭く、奥行きがあるモノ〉というスキーマを抽出することができる。

また、これらは、物体によっては一つの物体に複数存在している場合がある。松本 2000 によると、形状の類似の場合は一つの物体に複数存在することがあるという。このことから、これらの“眼”は、形状の類似による拡張であるということが出来る。

また、ある物体の一部を指す場合もある。

(26) 后来日本出版的名叫《花语》的书可称得上是现在已知的世界上最小的书了。它竟能从一枚缝衣针的针眼中通过，重量为 0.0076 克，100 多页，只有指甲那样厚薄。

[後に日本で出版された「花語」という名前の本は、現在知られている世界で最も小さい書物と言えるであろう。それは縫い針の穴から通すことができ、重さは 0.0076 グラムで 100 ページ余りあるが、爪ほどの厚さしかない]

この場合の“針眼”は、「針」の糸を通す「穴」を指しており、上と同様に〈穴状のモノ〉という共通点に基づいて拡張したものといえる<sup>9</sup>。

また、以下のように所謂名量詞としても用いられる。

(27) 去年在省地质勘察队支持下，村干部带领村民集资十七万元，终于打成一眼井。

[去年、省の地質調査チームの支援の下、村の幹部は村民から 17 万元を集め、やっと井戸を一つ掘った]

<sup>9</sup> 針の穴を指す表現として、他に“針鼻”が挙げられる。この場合、身体部位である「鼻」の「穴」のイメージからきており、“針眼”と同様に〈穴状のモノ〉というスキーマに基づいた意味であると推測できる。

(28) 我们新建的一百四十眼窑洞和一百间房，还有一幢小楼房，也没有要过国家一分钱。

[我々が新しく造った 140 の窯洞 (ヤオトン) と 100 の部屋、それから小さな建物は、国から一銭も必要としなかった]

これらは<穴状のモノ>を数える場合に用いられ、形状の類似によるものであると考えられる。

## IX. “眼”、“眼睛”、“目”のメタファー的拡張 (2)

次に、以下の例を考えてみる。

(29) 张周强说，格栅间内的设备就像一个巨大的“筛子”，“筛子眼”仅有 10 毫米。

原水经过格栅初步过滤后，超过 1 厘米的树枝等杂质都被隔离在外。

[張周強が言うには、格子の中の設備は巨大な「篩」のようなもので、「篩の穴」は 10 ミリメートルしかない。原水が格子を通り、最初に濾過した後、1 センチメートル以上の木の枝などの不純物は外に分離されるとのことである]

この場合の“筛子眼”は、篩の網状になった交差している部分ではなく隙間、つまり間の部分を表している。上に挙げた例からは、<穴状のモノ>という意味をイメージすることは困難である。しかし、その出入り口の部分に着眼点を置くと、上で述べた<入口が比較的狭く、奥行きがあるモノ>を指す意味から拡張して、<囲まれた空間>を表していると推察できる。

## X. “眼”、“眼睛”、“目”のメタファー的拡張 (3)

また、次のような“眼”について見てみよう。

(30) 诊断急性腰扭伤，治疗针刺双腰眼，针后疼痛立即消失。第二天复诊，又针双腰眼以巩固疗效。病人起针后行动自如，腰活动如初，半年后随访未见复发。

[急性ぎっくり腰と診断された場合、鍼を両腰眼に打って治療すると、痛みはすぐに消える。二日目にもう一度診察し、また両腰眼に鍼を打ち、治療効果を定着させる。患者は鍼の後は自由に動け、腰も以前のようになり、半年後に定期診察しても再発は見られない]

“腰眼”は《现代汉语辞典》によると、“腰后胯骨上面脊椎骨两侧的部位”とあり、縦に伸びている脊椎と腰の骨である寛骨が接した部分にある経穴であると考えられる。このことから、“眼”は<ある二つのものが交わって接している部分>を指すと考えられる。

また、碁盤の交差している部分を表す場合もある。これは、碁盤の目のことを“眼”ということと関連があるといえる。碁盤の目は、縦と横の線が互いに交差している点の部分のことをいう。

(31) 胡耀宇此时下出了绝妙的棋子，在白 172、174 手中央做眼后，于 180 手送吃，之

后白方大棋先手脱險。

[胡耀宇はこの時、絶妙な石を打ち、白の 172、174 手目が中央を欠け目にしたあと、180 手目に持ち込み、その後、白の大石は先に危機から脱した]

上のことから“眼”は、〈交差している中心の点状の部分〉という意味を表していると思われる。

また、“目”を量詞として用い、囲碁における碁盤の地の「目」を数える場合に用いられる。以下の例を見てみよう。

(32) 这是一盘大杀小胜负的棋，当下完 296 手后，依田的白棋终以一目半取胜。日、韩两位高手的交战，引起中国棋院的极大关注。

[これは激しい対局であったが際どい勝負であった。296 手目を打った後、依田の白はついに 1 目半で勝利を得た。日本と韓国の両名人の戦いは、中国棋院の棋士の大きな注目を集めた]

これは前述した碁盤の「目」が身体部位である「目」の形状のメタファー的拡張によるものと考えられる。

また、“眼”の抽象義の例として、以下の例が挙げられる。

(33) 她记不得在一本什么书上看过这样的话：所有的有教养有身份的太太和小姐都在心眼里对妓女生活羡慕不已。

[彼女は何の本でこのような話を読んだのかは覚えていないが、教養と身分のある婦人と令嬢は心の底では妓女の生活に対して羨望してやまないとのことである]

“心眼”の“心”は、抽象的コトガラであるため、この場合の“眼”も抽象義として捉えられる。“心眼”は、「内心」という意味をもっていることから、“心”の〈奥〉、または〈中心〉を指していると理解できる。つまりこの場合、具象義における〈交差している中心の点状の部分〉というイメージが、抽象的領域にメタファー的拡張として投影され、抽象物の〈中心的コトガラ〉を表すようになったと推測される。

次に、以下の例を考えてみよう。

(34) 表现人物性格的情感，除了发音以外，很重要的是依靠唱腔的曲调、板眼、旋律、节奏来表现的，当然不能简单地理解为只靠发音方法就行了，但是，旦角的发音方法应当是表现人物情感的重要因素之一。

[人物の性格の感情を表すのに、発音のほかに重要なことは節回しの曲調や拍子、メロディー、リズムに則って表現することである。もちろん、単に発音法だけに則って理解できなくてもよいが、女形の発音法は人物の感情を表現することが重要な要素の一つである]

(35) 在板眼上，作了一板一眼和一板三眼的加工，同时灵活运用了“配曲”的变化，从而丰富了曲牌的表现力。

[拍子においては、二拍子と四拍子に作り替え、同時に巧みに「編曲」の変化を応用することによって曲の表現力が豊かになった]

例文(34)の“板眼”は、〈拍子〉という意味を表しているが、これは、例文(35)の楽曲の曲調を表す場合の“板”と“眼”が熟語化したものである<sup>10</sup>。4拍子間の長さは等間隔であり、“板”を「強」、「眼」が「弱」を表すことから、機器で測定可能な「音の大きさ」を表しているのではないかと考えられる。つまり、この時の“眼”は、上で述べた〈交差している中心の点状の部分〉という意味から拡張して、〈点状のモノ〉を表していると考えられる。

この場合、〈点状のモノ〉であっても、ばらばらに存在しているものには、“泥点”、“斑点”、“汚点”のように“点”を用い、“眼”は用いられない。つまり、“眼”が〈点状のモノ〉を表す場合には、碁盤の交差している「点」や拍子のような規則的なものであるため、〈ある一定の基準をもった点状のモノ〉を表すと考えられる。

## XI. おわりに

本稿では、認知言語学の視点から「メタファー」、「メトニミー」などの概念を用いて、現代中国語における身体部位名詞である“眼”、“眼睛”、“目”の意味拡張について考察を行い、その認知メカニズムについて分析を行った。

身体部位名詞である“眼”、“眼睛”、“目”は、基本義から「全体一部分」の関係に基づいたメトニミー的拡張、視覚のメトニミーに基づいた拡張、【容器】のイメージスキーマによる拡張、「目」の「形状」に基づいたメタファー的拡張により様々な意味を有しており、さらには名量詞、動量詞として用いられる場合においてもこれらの意味拡張が関連している点について考察を行った。

現代中国語の身体部位名詞においては、「頭」を意味する“头”、「手」を表す“手”、「足」を表す“足”、“脚”、“腿”、また本稿で扱った“眼”、“眼睛”、“目”以外にも、「口」を表す“口”、“嘴”などといった身体部位名詞を挙げることができる。これらの身体部位名詞も〈身体部位〉という基本義から他の様々な意味へと拡張しており、「メタファー」や「メトニミー」などの概念を用いて、その認知メカニズムを分析することができる。他の身体部位名詞の意味拡張については、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 1) 日下部直美：试论现代汉语中有关“身体部位名词”的语义扩展问题．名古屋大学大学院国際言語文化研究科硕士学位论文，2003
- 2) 日下部直美：试论“头”的基本义和语义扩展．多元文化．名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻，5:201-211，2005
- 3) 日下部直美：“手”の基本義とその意味拡張．研究紀要．星城大学，20:35-40，2020
- 4) 日下部直美：“足”、“脚”、“腿”の基本義とその意味拡張．研究紀要．星城大学，21:35-40，2021

---

<sup>10</sup> 村松一弥 1965:32 参照。

- 5) 榎山洋介：認知意味論のしくみ．町田健編，研究社，東京，2002
- 6) 佐藤信夫：レトリック感覚．講談社学術文庫，東京，1978(=1992)
- 7) 山梨正明：認知文法論．ひつじ書房，東京，1995
- 8) 呉琳：身体部位詞の多義性とその習得—視覚器官〈目〉の日中対照を通して．言語文化教育研究．言語文化教育研究学会，12:187-197, 2014
- 9) 松本曜：日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張—その性質と制約．坂原茂編，認知言語学の発展，ひつじ書房，東京，2000
- 10) 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编：现代汉语词典(第7版)，商务印书馆，北京，2016
- 11) 村松一弥：中国の音楽．勁草書房，東京，1965

#### 例文検索

「北京語言大学中国語コーパス」: 北京语言大学汉语语料库(BCC) (<http://bcc.blcu.edu.cn/>)